七部集大鏡

冬の日　一

中村俊定文庫
文庫 18
999
2

信濃何丸撰釋

冬牡丹

凡詩書礼楽を一日も学ぶを怠るべからず又詩一日
学べば一日の益あるこの又詩ゆゑ一日ハ成長するなり
時なる一一詩書なくても海内の人ゆゑ例の
六指なる一一詩書なくとも知るとも知るべしなるべむハ
狂歌なる一一さまたげの詩かゆゑ俗人の
二字を字眼とす俗を亜名を切ヨスルなり此
詩かゆゑとも一日を学ぶ俗人を何故ゆゑあの
日を成りなるやとゆゑよりなり狂歌の才士をハ歌ハ
一面ひめ俗人の二字を字眼の歌を下心
よりくみをまるより礼字眼なり

牡丹本草礼を作る所ゆゑ作ゆゑ
消わひぬうたをゆゑ人の礼礼いるゆゑ身をさいのう
し礼歌の歌ゆゑ世を歌ゆゑ礼ゆゑひ合すま
ハ中し学ゆゑ者わひをゆゑさゆゑ又歌ゆゑ歌ゆゑ
よくしゆゑの歌を吟しの一しして自情礼細みて感す
面一正紙興立の一日を礼日一部の大事なるまハ
詩従ゆゑ従ゆゑ第一狂日の二字をゆゑ
しなとゆゑ惑説なりと初ゆゑ一し後ゆゑ狂日
の二字をゆゑ礼ゆゑ面ゆゑ面ゆゑ
面ゆゑ面ゆゑ面の日一部の日尚礼二字なり五巻
めれ日ひゆゑ秀日礼重ハ狂日礼対ゆゑ面ゆゑ
なり一日ゆゑの世ゆゑ意ゆゑ角ゆゑ山茱萸ゆゑ
本ゆゑゆゑとまゆゑ此ゆゑ日ゆゑ眼ゆゑをうけ面ゆゑ
まゆゑ知ゆゑ一一甲子吟りの本書ゆゑ當國

松平より出て京良井一伊侍の後江戸へ交易
して常府を伊勢の御師なり歌義を
学ぶ人の犯を求めんとして書けてあり次に行
歌のみを初芸歌と書てやゝ医者といへれ
通称なり既に三年雖知苦無と号す
をうき行歌をけうるを家此なる八次第に病
亦をうすくなりゆき業のをうしうるを
をえんきうて詩歌を狂し歌に狂歌の奴と
なりを方を絶やまなりを祖蕃は武家
なりなりゝ小方の学問して例の士なる
れやゝ医と国家なり既に初任者の記に云
任者を命の状をうらやむと詩に八うし侍
主人なれんまを方れ侍るさきをえきりての
侍犯侍遠まして詩に俳諧の奴となるを為の日

のあしきしきに入れかつをひ紙に入れ中に
ふるさとなるまに入れ母えて昔狂歌の才士行家と
いふものの歌を使犯をさきにおもひ合をて
行家と戦方し不肯なるれ行て物をて歌
しまるなりゝ書に似るをうきふるなり
といふ説を書きひるきと為に入れ
歌の小まて方名を詩の小なるを拾てきけ
をうをうのなりをうをへの小と唱をはら
うきるをうを侍に曰をうをうをひるを服又
をうをうを一をうを天地自然の野なりて一大書
なり象を似て為ををうをうをへに服にをを
やをうをうをうをうなりをうを紙完紙あるるを
侍しを法をうをいるをあるを他詩に得を
口決なりをいふ族を蕉門れ拾方を為し

世すぎのさはりなんどのなすところを規矩とさとく知るを
たしかなるに似たりし
蕉翁曰さはあれど一書を杜撰の書なりとせんか
人意用捨れ人のおもむき大きに文考のあざむきたる
ことを混して誕毒をなすもの不すくなからぬはおそる
べし
たとへばやとはし筆の笠れ山茱萸花
一書に詩やしきを此にとりみてよむむとに見より
ことごとくよむ時は水辺のものゝかゝり候はなるべう
かぞへあまたしてなりから旧本にも濁をきかぬをつけ
きやうこそはしらかとよみよ子細あれ不合れ竹
字は似たる人の詩とうけて笠に山茱萸花の
みゑきたりけるを世華にて見るにしりをかたる
の略語なるを人のよし此方かくも稀ならずとかへつく

とくもとくしとさいひなるを見もやみに覚束なく候
なくさめてとがしすりともいかならん八とつべ水通
韻あしてこそもにけいつまりぬれをとけふるなりへし
成美八曰竹の物語でら和三年刊行日数つなり
て清洲の家令名古屋にて其あるさてしらいざ
町にて家をなりて省板をもちり出しぬ連折も
多くの名は今がまゝと彼紙子にてかくうらなり世帯ハ
末綴れ丸なれば梅なりさてもいうなるすいひくらのさ
細の元の人をさしてのけのむなまり其形しつり
多くの竹斎と業医善狂歌住尾張名古屋猿丘
江戸神田覚文年間人　又曰八雲抄巻之二
雷散條下にありし竹斎とはいしかと古人の語と
又曰枕草紙にかけれ語らてあらねとく人れあげむ
にぬなりてしとりしなかけるいとをとの

蒙の笠曰古のとなしゐを山茱萸花と人とよみかけて
後しきか多なり二百れ石の類ふ白一斗んてつんてきと
又之し　愚考ふ是し顔きも花ハもかなりらうしろ
なり炭俵ふ是角れくばしろ中ま數ふ白一斗廿粒
の顔く文曰ま稲く酛の来ま并作くるよ水ふまれら一斗
あら置あけ所顔頒の未のくら實胡云々と上と
通音なり味かしふ以ちか山茱萸花又は詩や能言の
と然さか眼ゐり一書ふ是ふ山茱萸花んとぞしてし
ひたしかを入を知と眼きく過ぎか眼あるとハ作
てゆるら味あるか王の栄のやうふ人名の花を云へ
を望あり八斗一石を造あてをて眼す大食し件年代の形
よろなるわ人れ花まさて作る江案花いとひ
あるなりとまし人れ花を云んとす御座され
えむる之此余まも利生とハ勿顔なれ注

すゝきて粉し云々諺なり
　背明れ主水ふ酒壺作らうまて
一書ふ日ふ主水ハ明石ハ良和となり以ふ酒屋なりとぞ
さよふ主を称へ以明石よ良和てて六条本願寺の役人を以て
酒屋ゐきてあらゆれ又一説ふ背明村とりふ所よ良水
とりふ酒屋ありて天子一上酒をしつらなりとぞ　此
説も又叶せれ躰よ酒を作らると見ゆるをひつのこと
なり又曰堀川蜘小路巻因屋とりふ酒屋よて背
明とりふ店酒ありて売なりとりふまき粉あらゆれ
又一書ふ主水司を旨とつるれ古なゐて清酒
草ふなりむとなめて有作ら多のま造を之主水名を家名
ふて酒とと作らることと云々　愚考ふ主水の造酒
を為なるといふるで非なり職原ふ曰孝徳天皇
大化五年始て八省百官を置八省の中宮内

省の下大膳職木工寮大炊寮主殿寮典薬寮
掃部寮正親司内膳司造酒司采女司主
水司皆是宮内省の所管なりて八省官
吋造酒司主水司は二度を経たる後に造酒司
の造酒司を兼帯すべき旨なり神酒のこと
まわとしいふ神代巻曰吾田鹿葦津姫ト定
田を号けて挺名田といふその田の稲をもて
天甜酒をかもして嘗うまつる又太田命伝記に伊弉
諾伊弉冉尊所生和久産巣日神を児豊受
賀能売神月天より降坐善酒を釀造法
神代より造りまつる酒を主水の為て造らしむ
いまこれを全体酒を造るといふ白酒赤酒
酒醴造るよあるべしやいかゞ
やうなるとなる論するはたらあ従也

又一書に行成と主水とを相撲をとらしむ
とありしとき主水とくるりて行成を仆すと
ありて昔こと主水を眼兼者として非人倫なる所
業なりとあるなるまゝ八幡宮に見るに
号豊日主水を水をうれ出なるまゝ使まるあれ
酒を造るべき謂なり

うられ造酒を始まる赤酒

延喜式赤馬と限定したる造酒意味あり主水
の酒醴造らしむる都うを造りと見定めて万紫
千紅とまるまり極めたるものなりすべからく神に
しまをとて赤弱のそらちなる田井を都とるべつ白酒
なる黒酒なるまもうこなる清撰なるまもと為
赤酒は色を白面白しまるべき注するをあるべきなり
芝山曰長崎門より西の俚言に酒をしむを赤酒

よ[illegible]といひ然よりは酒店へとりて飯を赤ゐるゑ鱠
て注ふとりて長醉の興よ[illegible]てそのすむを云
るる一

胡蝶のかをりすきれ有ひる花

[illegible]日陽氣初てうすくなりこのまをきをよ
ゐひとりて胡蝶すきよ限られ[illegible]と[illegible]れ同
しすみきりをるれ[illegible]長落の本姿こ
[illegible]考源氏よ[illegible]作の[illegible]と[illegible]
日のあをひを作れ[illegible]の[illegible]
[illegible]ようられまてよ日のきをらめくをるり細を
すきををはよひをうるりまるをやられまてやら
日れうはるをるをるれるきをとひれりをる
るり[illegible]れ伏ををを味ふひをる一又万葉
の物よ仙[illegible]妙をを白きをはけてをこ

よ[illegible]ひをを[illegible]よ[illegible]胡蝶りと云て
赤ゐるよ白ひれうはるいと感あり

日れらわしよ[illegible]よ米をとゝ刈

[illegible]日米を荊をいを一の鄙言あり[illegible]西風
の色鄙ををいひをく[illegible]て連絡あり日れちり
を日れををふ[illegible]とする形あり

我[illegible]を[illegible]よ宿[illegible]
髮をやすをを[illegible]れを
一書よ業平れ[illegible]を[illegible]て悲ひて髮をを
やすとはをるるる一[illegible]五中將二条れ后いを
をくうとををれ[illegible]河荒[illegible]よりて世[illegible]と
をを業平[illegible]の髻を切てをり業平髮よをを
やをむとををり居をるをを好をるをを[illegible]花みむ
と吾書れをを一下ををるとをむ　愚考[illegible]を

荷ありの法くき業平朝臣の俤まさに似たるを
さきたる髪をなでやすといふまでさ
ぬをなつかしとうち伊勢物語のうちなむかし
心ばせまくてをさいの子なるをとこ共といふを
よ家ばらうてをうそをしたとかのうちの
宮くらまさいとまさるきさきのいちのみこの
と因ゝむとてあの男なるをえていみしの
すきものなく出ぬさやとてあはせるわらんまり
をまとをを一書還俗すくといふを非なり一し
いはるものいらとを乳をあらすて
きをなをとはよすこしと法
新法の曉さらく上人を燒て
一書曰ひろくまこをこをまをる高をの異を
うゝさうひをうけて髪をきうまあるさ推き

りのまをて引をるさまをる乳母の俤よまをうこ
決をの俤よ乳をすをるといふ一人の髪
ふををうをるをうる安房ををえていまく卒
新法れ子の消をあるひをまをるをか
をるこのめし國西れるををの人りて前の母よ
をのうを法歌ををりうをまハ子載よく
れうまをををををはをのをなをなをれ感
するふあををを
子の俤この眼よりていをる誠とれをまを母
の髪俤ををうをる法物をりてりを髪まを
をるをきや髪をりを眼前卒都婆とをしま
消うをむよ消あをを髪こをと髪をれまをと
おめをこの二をの間よなををのをり髪をを
あをれ俤の字をををを一をよ一をの法けと

いつのまにか[illegible]ものとなりて[illegible]
[illegible]　　遠考虚實ハ西鶴よりまさりて世人よ
ゆるせる

ひろしを奏ふ　[illegible]　虚家
田中ゆるふ方こゝに柳　[illegible]
雪よりもねたしくへうちむとこの
遠考ふまむ柳を津田中より[illegible]
家を芦荷の俳と見て　小方　柳を[illegible]
芦を津西西沢ハ芦[illegible]の一名にて
淀川のすちなり大和[illegible]
夫婦して住[illegible]
和義の[illegible]
[illegible]はよ芦[illegible]
[illegible]

後の[illegible]場の[illegible]て淀川の[illegible]
むしまわ　伊物の浮洲と[illegible]
杜撰なりすべて俳[illegible]
後ハ俳[illegible]
意[illegible]
[illegible]
[illegible]
二の[illegible]
[illegible]
一書曰一鼎二鼎の女中尼[illegible]を一の尼二
の尼といふその尼の所家より[illegible]
その尼より盛の[illegible]
[illegible]
[illegible]　　[illegible]曰[illegible]

かのそのりすむ町の中﨟ひと定に一の尼とく
より下ヶ居して杢むかし二の尼と別れて
法師をかはしけるらむ芝吹道なりきて一所に
宮仕をし一の尼れなほわりくて住所に侍ねば
とめて訪ける形もむ一の尼宮中れに精ひな昔
なほりしく訪来わし二の尼に返来の花をむ
つしにそれは終や紛の毒の紛をいひよあそしおかの
なりてより後のるすなく法ね四なるむまわりらへ
まきみのありまふてなとなく下情侍達へ候
この数月雪の年よりさ宗達へなく擇ふ報に
時もんと思ひても君と分れしく主住の言ふした
若のふかみまてはと荷淡してものいひさまう
女の情はえるゝさいくなるは也此両人ともに接て
宮女形断あ生いふに及ぬ鼻一の尼八俗にして

を鼻すゝりして泣ことなり　愚考左鼻曰涕
左眼曰涙いふ違ふるなみだなり声をあらして
歎く時は涙目より出声を呑て悲泣する時は
涕鼻より出るなり則なみのむなみだを治
むるなり

宮ふ斗れば身すく報ならん恨うら
いかなる恨の矢をは射らる

一書に晋の豫譲は主君の仇をむくいむため
まさかしはむするをとて背むはらし偽なり
又を韓信またのまくし侍るのために
其のひ落て跌倒をおはけける侍なりと云
愚考豫譲か事は戦国策史記ともに趙襄子
に衣を乞ふて抜剣三躍而撃之曰可以下報
智伯矣遂伏剣自殺又韓信か事をのせて

始皇をうつとて人遣したる一し秦韓をかろかしして天下を一統す張良倉海君と謀り
て重さ百二十斤の鉄槌をもて始皇を博浪沙にうちあやまりて副車にあたると史記後漢
等に出て万世にたゝむる此あるを刺客鉄推さゝふ弓箭れ沙決るし是ひとつの附会
を云て故事諺に口清和の水美濃も源頼信流るゝ任し三須宇鹿を伝流採に任すはに
美濃と伝濃の境三坂といふ所にて難に成なり
その水源は山中に妖怪あり九尾狐孫の精すし
て神代より住なまて神通変化きもあり別宇
鹿の妻白菊を容貌玉れ妖怪山神に
めし合きて白日を変して黄昏とす路上に
様鉢を敬宇宮の一族家に一宿すときに

夜中白菊をうそ〻に目さめて見まゝて花しらる
妻宇北中の宇鹿郎等を引後し山中に
分入てりとむまとに孫に探り沼に浦為う
孫兵の童に三依道人といふ人あり是に対めて
吉凶を占に吉凶を占りとあるに前供人を人
らひ近習家物をこのこと云関ようきすに烏帽子
垂衣にて立出る次の家にまて美弱の婦人多
くう法きて客敬に通るよくし見すを女房
の白菊なり宇鹿思て是人のいの妖怪の
不為まてなくきの士さう女房の敵ぶるに
と目さあ手練の一東三箭きりしと引是ありつく
けさ刃に切てそ形う彼士三節の矢を左右の手
とに是とめて是体なり彼妖怪命数
や尽て万乗を投立日西に出て死て

それを此事小夫婦全うして終所なく恵まれ
物としいれ矣をそなるの者といの又次第白まれ
範の松を伐くれそのの湯をそしかるの此所を
畫篇といふも白菊れ故なるのとそく陸佃
埤雅曰猿性靜猴性躁至所林木振怪云く
抱朴子曰猴一名胡孫云く

盜人の記念の松の吹たれそのの
一書に美濃国熱坂の物見の松なりと云く
愚考中仙道赤阪の西なり古松を植て今
のそく享保年中に枯て伐中に枯るく赤賜に繁茂す
をそなるそ一奇なり
志ほ〳〵 家祇の名をつけし水
一書にみのく国郡上郡山田庄宮瀬川の邊に

此泉を赤地列宗祇法師に古今傳授
年てあの不まて松の根を泳をら
まりとなり又此泉を白雲水とまいふす
家祇を白雲言といふ也 脱て云紀まに
一書に云祇の白に世なるこそ小野
なりの礼

なりしとなるそそ人れ貴の物
烏帽そそそひすの函れうらく
あそまこの謎まるけ〳〵 時雨

一書に貴の物といふをうあていやし人の
貴まそなるく烏帽の甲なり亀の甲ハト蛭
に開ひて吉凶をまるそ胡蜜の
うらくまよきなりと百生て占人と云く

一書に蒙古の人の骨の形のごとくなるを
ひろひて見給へ骨果して古戦場なり
と見てその代りその烏絨の甲冑を胡王の
古とするやと云く
一書に謎をとくの對
俗なるひとつ蒙古の人むかしうきをとくとう
なりて日往の庚申待なるものたハ遠ひと俗
まとこと云く　遠考此三説ハ皆流罪の人の
俗なり祢寵ト此来由と以て史記の龜策伝に
曰自古至王侯建國受命興動事業何嘗不
寶卜筮以明善唐虞以上不可記已自三代之
興各拠禎祥塗山之兆往而復啓世家慈之卜
頌故殷興百穀之筮吉故周王王者決定法疑
參以卜筮斷以蓍龜不易之道也蠻夷氏亮
雖無君臣之序亦有決疑之卜或以金石或以

草木國不同俗云く又酉陽雜俎曰昔秦王東
方求珍異得筭袋作魚成
故云その形筭袋のごとし又南絨志云此魚を烏
絨と号ふる其性烏を好むいにしへ水上に浮て
よりて烏ふまんとすれとも烏ふまんとして芝を咬むを卷
て水中に沈むてそれを喰ふ故ようやくと書とか
彼流罪の人ちなみ演辺ふ出て遊遊すまいハ何
やらちなきものの多いハ人の貴ひ何とい心
ふるくもとの所をてみまとを貴ひなるていの
甲冑の事我国ハ蒙古ふ海合ふ
昔秦王の筭袋作りて
のうちくうちて竟竟の魚ハ胡國
所よあらまさるくまの一説告ひ遊ひて

我も此流れて昔よりむかしと夢まどろむ眼前に
見るかのごとくまさに烏絨の甲冑を着たる杜撰
なるべしとて涙をながすとぞ　又同時雅俗杜撰初唐の先輩者別離悲　又華陽風俗
記曰杜撰春至則時先鬼神者別離苦皆
涙をながすとぞ　のなるべしとぞ　一説

林水一升　ゆり　花
一説に花曲花の毒なるを謎として字を答て
林の夜の雨きさきとと陽利を
書よ林水を酒のかきつ
ものなり　一書に林水一升を酒のかきつ
とぞいとこうスイとよむ　林を酒のこと
まらく金気なり西を酒なりまと数水をひとみの酒
を書て酒の字は義を　まること一升なり
注なるべし酒　高なり　とくく　愚考林水を酒

くるを非なり一巻れうたる酒の徐注二字あり
及ぶ忘や先任の如く漏刻利は毫毛の事林秀記
まく刻漏制度黄帝　創漏水制器以分益長本
終ってを天智帝いまい太子の時始めて漏刻を
造りて時刻の証敏をもうむ

日本　は書　ゆう　坊子　月を見て
一書に酒好なる詩をもて彼の人を李白とも
をもきまいふるり盧仝と称しるく　一書に
李白を丈山なり石川丈山を本朝詩の名人
てみ國をもて日本は李白と賞称をもとく
成美　日素小堂家集に石川丈山の詩仙堂を尋
といふ詩六言六句　先尋日東李村翁對
中華仙願山鳥啼　そ松樹野客入老梅関
詩無行何要路泉石前翠微間

愚考日東のそこツトウしよの心下唐書日日本ハ古
の倭ーーと去京師一万四千里新羅の東南ニ当る
海中ニ在て東西五ケ月ニ行南北ハ三ケ月ニ行
国ニ城郭なく木を繞て柵ハなすなをもて屋
茨甚倭女多く男ハ少ク婦ハ髮を後ニ
ふさの後推髻ニ結て冠帯なし髮を後ニ
結ふ倭の名を恵て号を日本と更む国日の
出る所ニ近ーーよりて名とす　寒松日先哲
叢譚ニ丈山初年喜翟曇氏ニ後介羅山
学ニ懇窩門ニ一従事斯文才尤長ニ於詩朝
鮮接式称ニ日東李杜ニ云く物徂徠亦曰
東方ニ詩杰也　愚考奚城又有ニ乗寺号西
凸花ニ石公偉偶ニ凸感其地名同而違字相偶
自号凹凸窠　故日東の李白ノ坂と八作ルーく

甲ニ木槿をくさ心花開打
一書ニ眼ハ紫ニ山茶花とあるニ又中ニ木
槿をいくとしいふ疑ハ紫ニ眼の山茶花を
なるみて被ふるニ眼ハ紫ニ眼ハ梅ニ似の体
我のまくとくとく　一書ニ閑元遺事ニ曰沙陽王
進嘗載硝帽ニ曲上自摘ニ槿簪置帽上ニ遊潴久
而方安曲終花不墮　嘆曰花奴　一書ニ玉蕊記ニ
織人ありとくく　東坡の詩ニ沙陽真天人紬帽著
紅槿　愚考ニ多ニ擊ニ歐陽公帰田録ニ云ふ字
當音滴以手丁丁亦擊物声擊音戟扣也打也
ら礼字義ニ曰きくく一きるく源平盛衰記ニ
高倉文故大臣師長ニ西国一流罪の義ニ此宗義ハ
治承記ニ一面をのきて撥ニ琴を弦を打ると
ありとくく　月ニ月の帝一織人の中を

こゝの本様をかくしていかならむときこえんとのせち殿
の心ねまて俄様を宮のみさきうつしまもしておはれ
たりけり
　うしれ給ひし中にさまりける
一蓋は大和の国にしつらひて蘭陵の分家あつらへきこの
牛をかはしやゝかなるのを進らしその牛あらはりと
まうす時に今義一笑れ和歌をつらして
我のかしこまりてうしとや猶ふるみよしの
其後此れいのちまことならく
大きなる山て亮花あつらへて　真乃花のかしく似て
牛すみなり人なる牛飼の御名ありて御縁れ影なく
関るとにいふ牛飼れありそまゐらいよるいの人
見るなりなる大きなる御堂を建て縁勤をつとめ
居るなりなりえもいはれぬ大木をもて此うしの姿
てわらぬその牛ならやましうちよりうべをえ進ハ
いよし余りさる誌まもて彼影像を書せむといふそ
きその西の京によるく松こなる堂の前なる迎
紫如来当入涅槃法仏菩薩幢幡時結縁にぞ
なんぞある六月の二日は眼入供しむとぞその所
日ありのみなりて此御堂にて其の牛そへたりあるよしな
きとの所ゆるきこの山に来て花そなる今まで此寺の旅
勤供ありけるまいりきのみ多堂もいかにきゝその牛をそへて
ますますにいとゞりてまかりなると云て　松ゆふ八月
二日ぞ迎菩薩入滅れ日ありしそて此讃意と
いへはその牛仏へまかりその群集れ中にも所にあ
中なるいさき本様をはむさしをさる琵琶打
る讃まて一人目立て蝉丸れ宮のごとく語ての
人ませてなりかるよし一曲して附ふまふなりのこ

この札をこまこの生まれて年五歳なりしが
ありて夫婦なくなりぬ此の娘ひとりをめのとにあづけ
若き男に附て発心をすすめ出家の道に入
の為に所々の名山を尋ねあるき国寺に入
則発心をすすめ出家の道に入

異人 殺れ魚 をこい まくき

一書に曰く中比一人の生れあり市に出て
るを異人買ひ殺の魚をこいてきて夕つけ
賣ひるに市人を宵に世中に有りさるを財
しに得ること云へり 一書に室の八島に住
をりしに此の魚を鬼掘て人のまと
取るを見るとなりて子の代に成ツ
魚を薬の火に焼て

をりしに人の子をとらんとする鬼失て
後にその場に殺を絶へ出ること弘法大師の室
の八島にて此の場にこの子孫代の法華経を
をとまりて東国にて法師をなれ代といふこと
一書に上総国別の僧寺にて供養をなして
まの法魚を施して布施とす又寺院坐禅の
供養のなさるるにて魚に成名を記して布
施とすと云へり 一書に八幡の脱脚病のやまひて
おのく失る年号を名の第九なりしと云
同書に此殺をコノシロといふ云室八島の孫
記に云むかし一人の翁みめよき娘を持る
の寺にのぞみすると云ふ娘をかくし隠
中に玉寺のとこのめを取て死ぬ
掘の中に殺を入て
をりしに八年をへて云

画一老たるに商人なれども牛の背にのせて来る物
さらに故いかにといふに錢あまた翻すれときたる画
これ次第ひろがりてかれがために牛を玉の扇に以一千二百八
こと訓すなはち此代を一千二八に編みて見えたり　さ
すまじきいはけなき人の對ます叶ふ一ゝれて商人の解
なれど此鬼此為に人贄のすゑなりし
我しのまゝ隠れたし此星を念むべく
饗注皆曰子ぬしるとりふあいづけて子此を名き
人の祚りのまゝにし祀るとみて神仙す錢を
さゝけりとみえたり　一書に漢の武帝此を上る一の
きこやうに今日ましろのひて祈りくはしきの星東方
に逢ふ処の木曜星まへをわすれ入方福をいのる
処のならはしにして壽命位あるなまるを後葉を持
よしありとなく　蒙曰祚前に飲れたるさしけるし

いのるにあつれば却にいつくし潔齋断食して壽堂上
に有る坂にし夫よりいの此のさきなにのちま事をさまつり星
を肚とせよ志をもつてまつる道を拾て平人なりとのかうし
次の日蛛の世をみなる事此みよのりてみえるぬを
なくりきかひるなれとをとりてひいのちさまなの
まそのふ紀二日此為云ふれ此情を味ふあつて大いに微
妙の境に至て蔵しらま道修りのなる事道　悉是かりしを
胎生しる例和漢ともにかぎりなし中に神仙傳
に曰傳説死す歳星東方朔生而此星さかれを明
すの星をさ満然のうぬかわりて完なるし
さよそ蛛の眉つきりのゆた
一書に漢の張敞の眉を画てやわし故事
ありともあて
一書に蜘蛛聞して此さ家に住して様の傳へ

姉八あくまで若の法御乱をやしきむといのり
よ姉ぬきいまし出ぬうすく行ぬ行ぬ眉
をくまきて出ぬすく仏ぬ此二ぬ義をぬて行
ぬ外ぬえて心ぬ所よ出ぬのまくぬぬくく
みて法ぬ仏ぬ　愚考後一条院寛仁元
中姉妹三人同時列后位と本朝年鑑ニ見ヘタリ
後ひくく香湯よ出ぬの山水ぬと出ぬ仏ぬ波入て
一書に出ぬの山水ぬと出ぬ仏ぬ法華経
うまくくぬ義花を後ぬをもて すくくひ取ぬ
又一書ニよ法華ぬて出ぬ産婦病人産ぬ腦湯
ぬて香湯といぬ　愚考に出ぬ
ぬすくくひとといぬ非ぬ腦湯ぬ形く
海ぬ及ぬ仏　眉こくぬ平人のすぬ色ぬぬ
ぬくぬ仏ぬの都の仏ぬ見て後ひくく

とぬいぬ香湯ぬ釜の中ぬ出ぬ桶ぬ桶
の上よ簾掛といぬものを渡してぬいぬを
出すぬ家ぬぬ義花を相二ぬをもて出す
ぬぬ相二ぬといぬ寺ぬして後ひとぬとぬ
仏ぬ法ぬ禁中ぬ仏ぬをぬる仏ぬ
すくぬぬ行ぬ花ぬ仏ぬて出ぬ
一書ニ居湯の席所ぬ大塔の宮ぬ旧跡ぬ
て出ぬ架ニ行ぬ

廊下ぬ義のうけつくくふ
一書ニ湯屋ぬくくの廊下義の新義ぬ
ぬくくふぬ日出度揚ぬ廊下義の新義ぬと
ニ後廊紫義架ぬ　白氏文集
ヘ忌棄無仏ぬふニ出ぬ懸つくふのこくぬ
花房をこのくくぬ働ぬうと知ヘ

れ見人ともに壮年いまだ衣を振ざれば
一書に杜子美の志大雖偽未拂衣といふ句あれば是
を含る句なりといふは非なり　一書に句
書に如く振衣千仞岡濯足万里流と思ひは僞
に秋津洲の國々を經めぐり名所古跡を遍歴
して泉石をたづねてと云し　曲礼曰十年曰幼学
二十年曰弱冠三十年曰壮
古川要れおこしに誘はれて帰る
一書に翁は讀書泉石を尋ね煙霧に分入
月に雲に雅懐を述て生涯を楽まむと五年
しに到ると以へども五斗米のために足を縛ら
まで今その屋を果さば賓譏を暇事を
好ばして去らしの雲に誘はれてふるよふを歎
息しける案意限りなしさて本句に切字の事

誹家すなはちしに論して初心の惑ひあらは彼りに
も切字なきも発句に似らばと頑にきはしる字
例ろて切字は入れ不なきをも押て切字をとよむ事
却て句は意を損ふものあまらさ例りとも当時は
大概その心を得されども先師の字傳へらる切字の
口傳をあらましも志らに志るす　新に式に切字はすへ
初心を助る為なれば宗匠勝みてきやく傳授す
へしと云々　先発句は混沌の間より太極の一気のうご
きを出さまてと陰陽は分めの分きされば発句に切
字を用ゆ時物二つになるまでにはじめて天地陰陽とを
なるなまり切字を用ゐるは物に對して前別の義
なり切字といふも発句にさけ言らしむの為に切
字を用ゆ事句と添めを分むなまなめし　下略
惟然曰切れ節々竹ある如くに傳へたも也

なきハ切なるべしとうち切字を入るべき句ふ
然と切字を入さる有ん歌の秋風ふきまさりて悲し
き葉の林まの白き松倉嵐蘭この追悼ハ句あり
亦當帰より伺ひきハ塚のすみまで草ぬ白き出羽
の呂丸の旅中ふ死する を悼める句と白れ解ふ當
帰を當ふ伺るへしの意ふして吉園ふ伺うむる
を待その身も伺るむとハ松のひびきむふ伺そ
塚ふすむとハ句鎖うまして伺るとすむとの視對
まうまるふ切字を用ひさる句師弟三世の奇
縁なきをまう切らさるを歌の微意なり 下略
蕪村曰我ハ句て切字とをいもに對字とハふ
と形う 愚考嵐蘭吾九の悼この句れるを金花
伺ふ此るをいひき又そを一つの体をらくを及ふ
しきに弟まう弔世ヒ

なるを族を百人ふ九十九人有
て法とハふるを紹らめ少ハ吉勝のやうふ
るゆくさそなる形れ大切の秘伝なるまとを
らとえうを行うをやハ一一作切字とハふを切る
まうまを伺うに字キヒ字まうまを切る
芭蕉の句字とハふまうまを切字とハふ
而て字きを大るまるまハ伺ふ出あうをふ
し除切大切るとハふ紹るまてきとる一一
の句まを切字を入ハしセツ字うるれを佳陽の
ふらに彼と兄とを合をて夫婦合侍のるれ
ハ一年ヒまてを嫁ぬうふ夫婦皆調ふと意
きるのるきまふ切字うを入ねを形うをハふ
を師弟を三世の縁るまハ切字を入ねう翁
れ微意なりとをなるまふ法うるきハ事

なり支那ハ切字と入るまゝハ切字といふて一字之
のみをすやいなるハ初心の学こうやうなる毎之を
努し誠とれしもハ一ツ[illegible]同書ハ又曰連歌本式
俳ハ切字を格字なりとなるまゝ切字ハ[illegible]
之を去ル一ツ[illegible]切字を取るまゝハ必なるの
一ツ翁の常言ハ格を一ツ格中ハ去ルハ
殺し格和ハ之を殺を法なり格を抜て格
和ハ殺ハ一ツ　愚考此論をいふ心抜て云ハ
ハ之を格といふ切字格字ハ格と之大違ひ
格字といふハ仮令ハ格日格番格字なるの数まて
之ルを[illegible]ハ格字と格字とハ違之
なる格和格和の義を教る隙なるハ[illegible]
一定しのさるのうハ[illegible]
すべ[illegible]

霜ハ[illegible]　[illegible]ハ　[illegible]ハ　蕣ハ　食

一説ハ今日を勧といふより[illegible]の字感除しと
注する人有まゝ[illegible]
の俳林良材ハ又[illegible]
一書ハ蕣のれめしとこ[illegible]
ハ[illegible]
き[illegible]
食喰ハと形ハ一ツ　愚考[illegible]
て[illegible]
しハ[illegible]
の士[illegible]
さて[illegible]一這入て[illegible]
毎の[illegible]
て[illegible]

かなれば此余情をさいてかくしとなりたるなるべし

神菊まつて孫なる煙れ拂をまつて

一書に曰まつといふ初をれさいこ書林をもて

第三とすと云く又一書に霜に紅の不といふ

より書林の作を附しかつ愚考すべしといふに

よつて林季を附しかの素の紅の不とうの書林を附

しかのごとくにて是祖翁は一流を明らかに作りうる

まを添きよりの古語曰槿花發飯臺秋典

入文門こうらより不あるを愚時はさきよりけて

多作りのやうに云山崩すを顧ふ念れるこ弱の

附別事例

麻呂の月袖に鶯鼓を形するむ

一書に仲麿を吳亀二年入唐年二十六天宝

十二年皇朝に帰らむとして明州の津に出て天

の原ふりさけの松影を泳し又王維の送別の詩

なりそのこれ待人餞して鶯鼓るを明すむ

と成し

桃花を多をもつて貞徳れ篇

一書に月を常住不変のものれるまに八又春うつを

を附ふう　一書に磨といふより貞徳を附ふう

彼長既九と号して隠者形ふ篇をもつて落

不に五園の別荘ありて梅園桃園芳菊園柳園

芦の九園此ものを桃園のあるひるむ

一書に桃花を多形をもつて梅とも桜とも形

ふうを桃を神仙れ生数をるものをもつて

三子代業をもつていはれまをかのこに貞徳の

生壽をるうをわさはれ作りるうつし此篇を壽

八十余歳を持りとうさまに八番といふ理雅

といふひ句は詞かりし故何のことかとさらり
其等の先注にのくのかく云並へてる所もなからく
見中事なとするふしきるまでをさらしむる事一
月の事不審なる事もなしとて此等の事をふさいふひ事ども文
てある桃花といふ貞徳といふひまつてねるにすこへ
し又桃園として五園を定めるとてぞゝくる
浅けの注なり磨に貞徳の見込を述へたれと
まするゝ叶けやすきこ羯鼓乃ゆかりふかやすい全体
物れ注えてきむりに先の其日の俳諧を解せんそ
其の日よりなるき所に悟て解ゝす(きことゝ)と述
ひろきこ不よりする出してみきことする事ふさき
らふうそ外云並へすゆゑに成りく其れはゑ
其の足の流り来の日稼養附代そてよく見込て
解す人し又其の説春日の器量ノしようなよりく

さて此桃花を羯鼓に附するものなり円機
活法曰明皇弄羯鼓桃杏皆發又酉陽雜俎
曰羯鼓之音曰獨太簇之一韻也さまざま其時の
一韻と云桃杏皆發と云此を述事也所なるまで
て桃花をもて春を附けりまた附ける所のものなり
羯鼓録曰擊以兩杖又通典曰正如漆桶兩頭
俱擊以出羯中号羯鼓全体兩杖鼓と云

雨出ゆの淺香は田螺かえて見て
一書に淺とにいふより淡氷は沼の田の中を取よせ
て庭前の泉水にするとおもふ所に遣して呼むとなり
河原院の子贈れ塩竈をうつして又井山の
蛙を放ち又宇治の螢をとりよするれ數乃
書に引きて囲へまた俳諧のそのしみなり
奥のきさらき花を只注にかく

一書に曰く、この月は空を時雨れりしよりて人情おうたしみちのわたくの事れりひ安て只法のみなくとなり　一書に曰く、この月を而て世をわらふ人を指すりはきさらぎ死のさらふきさり法をもはるけくさ
なりむりを今は縁入のやうに服をなくて寒さ夜を志のく料なる嵯一寺の布の外なりとう縁ハ
寒法公の世代より伝り昭て二百年まで思らさる
ものなり奥儀抄に曰正月をれとなるりしを此月
さえうりて衣を更ふ事なるまてきさらきと
いふとなり　愚考に曰すを而て世をわらふ人の余
寒に堪なて法とをもて法人を実方殺の小
の方なるの伝こ実方殺法の小
北任に下まるひなるを五月あるをめをしりさり

さらきを因ひまふ此地に下めるさらきを
とや殺法の伝に浅香の沼の花の法みと
いふものを苅取て菅しとなり　後京家圖に
曰長保元年正月廿六日卒す又世法りれ
なりに曰実方中将の墓なる陸奥なるて
一ふるむと伝一説に誠や義人改まる
成るなるを懐奥なる小成てこのくまひし
なを此世なるてもの臺盤すいるを六雀
よりてなるなるとそ実方中将れれるひの
こりまやとなる誠小伝ハ御ふまるに乱
むとなく実方れ車跡技素捜神記故事該小
まあるまとなる略す彼浅香の花の法みを心底
にりりて浅香の国りまとなるて法のふ人を
伝ふるまを差ていふ正月れ卒去をぬ月と法り

こゝろを雑する人もあらむか桃花は三月の季なし
田にして二月三月に通ふむつきとしては時は季
なきになり弥生は季めくものになれる故に如月と
後の月は附合の法なり近年季重季戻季誇
に崩れたる時なとさはしくあらすなるまゝなり心
得すむへし一句の大事なり
席にゆけてよまれけるいとこなる男
一書に男は如月を位とし手より陸奥産の傾城
を見出して田舎客の相方となりしく〱春にけれは
まで語り合なるに同郷にて殊に従弟なりしと
打解くさまことにて次の句は彼従弟同士とて
より初き時に号は中なりしを女はくにすへきは
ことはさましく或は歎愛にせまりて貴られ
し也孫の末方まではとまたなりよりと恨れ

のこゝろしなり　一書にものゝうへ記して田舎は常
なりて傾城買女と成なりて甚よろしからすなりし
て今従弟の末と学てよりの怨面を赤らめい
まく悩て宵のあそひに逢ふに松山は彼ろけて
来れ翁来るを見なりし後果まて客の書とよきな
あく誓云してちまつりなるによりて舞ひな
さめそてゝその夜を打たれけて孫の末方まけと
さるものとよと恨のこゝろしとの佐なるなり　愚考
その以て言号なりし枕席に夫婦なりなるへし
又次の注に宵に翁来るは去るよりとて従弟なれは
田舎もれて雲気まて興すさめくるとは身勝手
の注釈なり夫以て宵よりかく翁来しは女房
なるなるらむとちきりしは席にけ奴方寺とけ
てそのゝとえとりて見て達八従弟なるをさてそ

今まて心をそらしらを二人とする小恨今さら
なり芝必同姓の親数なれとも成へし礼記曰取妻
不娶同姓故買妾不知其姓則卜　云て賣女の
なるなるまはうらしとなる為来なく志はまとなるよく
し紀して見まとも同姓の徒来なるとも手悔
みらら隙意なるの白虎通曰不娶同姓者重
人倫防淫泆耻与禽獸同也又論語曰君娶
於吳為同姓謂之吳孟子君而知礼孰不知
礼云て芝法小妨られる恨まて堅気まるなら民

口をしと痴をしらきらるるき
四月を敵　小首おとわをむ
小三たま孟とをひとらをひ
京往時日結約を海て吉日まて格りしる歌
なとの痴を見出さまて深秋の妨といるる

よやうそらきりてる面一きりそのちりくなる
しとなる次第を竜城防戦の術まはきて四月
を敵の方へ首をれそるむと見時を格めるる
出の痴をを恥られと名を惜む雪将丸侍こ
次を名残の酒宴まりて小性の小三太より孟
をとらをて大将の自ら一さし舞うるる成一
月を折ふ　この歌　牡丹ぬすん人
衆注この酒宴のまきまより名花の牡丹を
ぬすまむと思のひ込てる時雅の盗人月れう
るまと心をとるれて庭前を見きの人をる
をしき形のて云て　景雲曰花盗人とるめる
牡丹のぬしれ心の時流を双紙の地ようなの
らんしる強るる
おつしとれ丹地義　切町

初花の世としや嫁のいこのめしく
きつしを元こゝろ樂天の詩よりおこり謂劉
既葉終朝醉元こゝろ遠俗語を用ふる迄
既を意れたちひも粗ゝ後の祖蕭曰俗
談平話とれみえしるい談話きこ俗談
平話ををめさむこゝろこゝろめるゝとゝこゝ
しをうこゝろる形自ゝ出ゝ出ゝ后地蓋ゝ結
引迄ゝりさて初花のゝ白ゝ玉て世としてや
嫁のと書ゝ李宵てゝの注ゝ曰初花の世と
を迄きゝ既ゝうゝ注きゝしゝる女ゝて上日ゝ
の衣裳れ花やゝ形ゝ色ゝをゝへゝめ
ゝふゝてゝと云ゝ　遠考蟻のいゝ考てきゝと云ゝる
ゝをゝをゝめゝ云ゝくゝさ形ゝり
地蓋切所といゝ不ゝ地蓋切所ゝ
ゝを附出ゝを色考ゝ色考ゝ遠ゝ蓋れ蓋ゝて嫁入
れ行粧をいゝめゝくゝとゝをゝめゝるゝめゝるゝ此
注者をめゝて考蓋用ゝる見ゝゝこゝゝをゝなゝや方
ふゝきゝをいゝめゝくゝとゝゝ籠ゝ又不畏ゝとゝ
書ゝるゝ蓋ゝるゝ以不れ附子細ゝ　蓋ゝ蓋ゝ日此
附蕉家一大ゝるれ附ゝて初蓋のめゝやゝ
毋不ゝるゝ蓋ゝを新想の附といゝ地蓋切といゝ
ゝを沈然ゝして新ゝすゝ蓋ゝるゝ中ゝ小ゝ小児
の墓ゝをゝるゝ建ゝるゝのゝこゝ世れゝ一第一れ
くゝる新ゝみゝ新ゝ尚ゝ建ゝるゝ子ゝを第ゝ新
ありいゝめゝくゝ花ゝをこのゝる嫁入ゝをゝるれゝや
なゝりゝめゝるゝるゝの中ゝるゝ立て左ゝをゝゝりみゝく
らゝて色考迅速を新恵しゝるゝる
葉さめしのさて　七十

一書曰前白水碁を高麗といふ人より老人と附会せり義き附会せり記憶なきしうるしよいわるものなれる時高麗このちなりと云こ
遊考七十と切るるを礼記曰太夫七十而致
事若不得謝則必賜几杖又杜待云人生七
十古来稀と云へ狭衣に致仕の大納言なり
それを衆注に高麗といふより老人を附会すと
きまいの文盲の見といひ法華経に是より次下
別に説くなり

意をぬきぬきく除海をまより

林蟬のこゑに聲きく静さハ

一書曰面白き附会れとこのこゑに声きく不除海
に系得たれと学者えぬ声しや　一書に髮は赤
かれるといふより除海の母と見聞る

附会する一一漢土の説をひきて考へ出し
夫やうを待まそ機を織掛衣を織られた
して待事なり除海の母を至て思を深く
述て眼を泣はらすと云へ次れ白ハ禄師
のう一まて大悟の意を云流しうるを生
なる蟬の声を虚に聞あり聲をきく
一書曰唐猫といふより中華れ人物を附老女
といふて意を砕て甚面白し婆を焼
庵之話則老女禄邪に帰して除海の僧を養
ひ置てその僧の悟道をうるみむるを
小女をして僧に意慕の体を教ゆ即人今一同
曰正當徒麝香如何僧答曰枯木倚寒巖三
冬無暖気甚婆子曰徒二十年来俗漢を養
ふとうと僧を追拂ひ庵を焼うるを見られ老婆なや

附くらむ　風谷とまふ日黄檗禪師得道
後忽思省侍父母師往到閩中一婆子出問何處
来師云江西婆云我家亦有一子在江西多年
不帰師恩借宿婆親為洗足運足心一誌甚大
婆失記是其子次日運辭去於三里外説与郷
人云吾母不識山僧但母子一見足矣郷人報
知其母趕至福清渡運已發船一跌而終
愚老如此待人及子孫養育置之偽
形骸待人及子孫戀之如此況我子小
英也とのきはなしとのきはなしとの次又禪れるの形のあ
聲をきくとしの意味の深きに況を考へ光明
藏小曰除病を達磨の骨髄とす又曰除滅れ一
喝を烏啄豆毒のごとし人を殺して又活す亟
しなし業をもて書へ曰とをとをとを亟とを除

除病を地に因て名を得しり唐咸通八年四月十
一日逝す次の句を一書に曰秋蟬殺の寅二刻一意と
前句静さいとしひけこと
らうく仏の一き形り故に
よ文とを雲水の雅客をと
ひとりを典侍れ唐の内侍の
一書に山陰に現をひらくとしてあり小原御幸れ
休に見人の一くり一丁平家物語に文治元年五月朔日
長岡寺阿證上人御戒の師にて女院并典侍局
阿波内侍法衣をして同年九月廿六日小原に山
吾文治二年四月廿一日後白河の法皇小原御幸万
里小路中納言殿出仕業にて御製洛水に行の
橋らかしきて浪の花を盛形わ今を一余情ハ
女院典侍の局山路に出て接法み草れを形をと

て一て山を下るさきを男とさきを女と御流
して一人を女院まてまつりすひとりを居り
内侍のと見物まつる侍りを典侍居内
侍居命婦居也掃居りを此は居れ内二人れ
居を女院より志こうひ尼より賜りその侍るり
芝を一書に内裏上臈の旅形りむといふを
先注をりて宮侍ふ出そむれ偏執りり
三ヶれ花鬘尾也れ多いくさ
一書より数多れ女女並居り侍るまいハ家ふ内裡
の給人合をれりひよりもりの紀事曰禁裏清涼殿
南階前有圃雜其雜法家中雲客被出之仙
納弥市就此事決勝負一書ふ三日りてハるく
三ヶの津れ義ろり一しと云くれりふ漢土りを
圃雜のるりの玉燭宝典ふ曰寒食の節城

市多為圃雜戲又玄宗皇帝民間清明圃雜
戲を樂むとなまきやはり三日のるる一し
ろこのみいさむ越れ獨活 苅
一書ふ宮まを梦ふ裏一國しの産物を貢する
仲こ越を貢ふいすの熟徒るる一し揚ハ祝
云りて聖代のさるろこの丹いさむとを白
・支の公羽を悦ひて貢を貢きまるるる一しと云
一説ふ越の獨活苅を越後の弥彦の神事ふ
て伊夜日古の神を独活をきらひすよりて
弥彦山りをうとを生きとふ伊夜彦山の
神支ふ應對して此るを尋ふさらふそのを
侍一を侍りとき 是評越を貢ふすの熟語
るりとを逢をうけひりとそ申ふ 蒙宣曰
出拙より越後一ふいゆる道のかと吹浦渡汀海辺

山林の中に二つの小社ありと往古より大社に
して一ツ白髪明神と称す根元白髪明神地主の神にして独活荊明神
とそなの境地をこのうて強盗すとなり俚言に
いへる上古此二神基仲所にて白髪怒流よく
やすすまして神軍ありて海陸穩なるに仍
毛悉失すなるに白髪の社に独活を献
ずして独活荊の神うとて荊て白髪に献し
謝しまして白髪よりこれいさみ急ちつまり
まひて軍和平にまるに毎年陸奥きとそ
此例を傳へて三月三日を祭日とし中古より
大礼行なまて走子の衣装揃ひの装束を表
し数百人各諸を携へ独活を捧列
をなし進み路よりそのうに賑
白髪の社檀に備へ荊の神よりの献物
と称すり一ツを点ずれば忽烈風
風雷して仇毛を失ひるとなる去るに
星霜を経るにのりて神位衰今をなつかの
多くなりれ小社となるいさこの祭日に俚俗
独活を備へる小式の神はなる人を奉之
とこうや此家白髪軍れ松しやの形なる味の
まくそのなる神の活をめるとすに心れ
ひくまとより神軍とそれて志のるを附
出をしまものと神るを表れいさみこるさ
まるに強くふつくるよあるけや

杖をひくるに僅に十歩

愚考漢書食貨志曰以六尺為步

十間ばかりゆくやゆうすまでとあるまでの意なり先の句の意なり
一句ふまりを添する詞書なり

ほのぼのとあけぬる月の影すさび

一書に曰ほのぼのと空うすきあけぬるかと十歩に
過ぎぬ程にまどけしく降今すでに月と
のこりなくさるを花のしろく光なきに無しして月と
見なすと作まるなり　一書に僅十歩の名
なるをかりて忽月変じてなるを名ぬ物
変の歌恵なりと云　愚考世上の説に通り
なるをとるべきなり
方一寸ばかりなる夫白を解するを必そのこえをよく
し吟味して白情のこえの動くをうこのうるを
所謂なり元来此白は仕立をなれたるなり

孤きはこれ一きを月として字をへて字の姿と
なるをもとりなるはこれ空をこのやうにみるなるべく
ものいひけるきものにふれ仮令ありてなる十度に
一度なるなり夫霰は本情といふを劉向五行傳曰陰盛
雨雪凝而陰寒陽氣落不相入則散而為霰なり
なるて凝ひをなるなり一説ひとつの説授をみよ

五孔仙のかるを風　雪　霰　炭賣　霜月なり

遠加の巻に霰の白なるなり古書に住釈をきむと
れなるものを分論仏偈の集をはなるむとれ
なるはまた又を一ひとつはれ掛ものをきむるなる六白の
中なるものをまこと二白なるをなるをなるなるのなるなるなるなるなる出
されさるなるものなるしなる別なる一一既に無用
集なるなるあるまるなるなる紙字なるて書なれ日
白解をの白末掛なるなる霰なるなる文字を

あるべきこめるを云後同改れ癖棗なり又冬日
注解まのて云てまはるなとを書るを罪をれ
霜秋の字を注釈あるべきなるを古書の字を私
を書改るを正當を為
さ水わ　ふゆく水のいなを
一書に此服を添まて射の意有天地変氷月猶
張るを弁四く氷のひきを彼き出を水のいを
妻とを作るを亀又一書に月新のうをけ
しきをいるつを比喩して李を此余意をを
けるを服をといまて非なり　思考淮南子曰
日月天使也積陰之寒気久者為氷氷気之精者為
月云々さを先注のかし
歯茶の紫を初狩人の矢に員て
一書に是又李拾りまて射の場なを矢を
変化して亥を親想此而をさらわと放下し
て狩人とを附るを市人の初商を祝ふ
意りまて猟師の初狩をきとふきて歯茶
此紫胡服に弁このけて一とをの門出を祝ふ
姿重多このさくと云
北の御門をたしあけのまを
一書に寅に御所に初春の貢とを附天
例とを服赤此奏るを一北を極陰
りまて卑賤の者の通用す一き門なる一
曾を立曰前白此狩人を猟師とを見に古実を
正して武皮公事の狩を勤めに出なると見亥
してさてまを御門をたしの事此書に八附
をるを二白の間に貢する意出さらま
なる北の御門を通用の出入になり南門を

紫震殿の前まで渉規式なるらて是両の所此
白究て禁裏御所と目を付するなり

馬糞　一書に門前の馬糞を掃除の姿なり地紙形
に作末を結みてうきよりきよまる事是此のす
むさんかなりと云

菜湯　去をしむ毋辺の蒲公英
一書に掃除すると云あり素麗すきを
見出して菜湯者と脩なりそまに云この数
不淨にてみてをとをしむ情こ　愚考世に
むをゝまつきこれ去れてきなるきを中まる
蒲公英と宣めるを不ふおしくその陽とうこの
殊に蒲公英と書況て此字蒲公英（ホコウヒイ）と云人の
うを名をめて変をしまるまはその人の名をまて脩する

らうをけまるむ姫うに注まて
燈篭　ろくけまるさけくろ為
はけ萩の角かちろを撰て注
一書に菜湯所にうに注く姫のまむとあまこて
利休の蛇の徒をまるまあるむらるふけに三義
あり労気に注ていさそ良強きまを男
まさうに藤丈見ハ文藤を四とけるる気ハ
藤丈をむこの　愚考藤丈を年れふけ為
るるものにむ蛇を　一書に菜湯
の菜人儒者の蹟をて遊を遊遊
すり作を脩ふらうふけをうにくにハし
と脩綺まる堪なといふまるのらうを労なり
その心と労する義なれて家をものにに脩に注く
なるをしまるにうふけに成なる

しとなのたまはれとそなたなるものとしてつるはるの
ほうくそ傳の字なりこれはうのみ義なるべし又
源氏よ四石の入るこのこのこはきをへしなりそ八重
するるこ芝を置するを義を一種なるを非をぬ
ふよ時よ一一附の意をものよ浦くの形つみ芳
まて蛭を形くさめて世辺のてきえまへと
誘連て法師茅をとふ出てさるなり　愚考
此注者自ら古くふなてさらく言ものて強よ和及へ
引入るれ癖ありて又花をかさるうるをなされ
此らこまけて苦しきふなり芳氣なりこのれ
よ恋蛭をさるひはまして世辺の遺逸とまはるる
そ也物よ恋蛭ものく蛭ものよ蛭世辺生るる
よその面をとこふ　こ京の宮う又傳の
家義をあるこ作附の字こ傳ハかより上を

のはくこ作附をこのはをるをと
るるるれよ恋蛭をいるるこ十二三形るはしそまか
はくはこのはくく新の茅をさくはるものよみ春つさ
するるり世辺一まくるる蛭かるれをよ恋やら書やら
まこををまるるものを芝はくとはよ義を合点
このるるは一　一書まをくるはれ男よれをそく女の
いはまはるをくこのくむとるはりの芝めるるはくよ代
まをく強よの新まて男よ女れはくは雀を捉しと
なり形林良林よ見の大和のこはらてるるの伊
まるくむこの　一書よらくはくはくはくるものれるよ
さるを俗雀の捕林ふるるくらくてみをこの男れると
一人をれれれをくる作まて強雀くるくとをて男の
くさるくるくをの返くよ強雀を生をすとをこ
ふの注者いはるるくし先注ををやくるくむと

さまあしよいその旦ずまつりうらうらしてそなま　一書に
信濃なるあるといふまつ西流と萩の上に見立ていつ
まさこのよハきくものるまと西流の腰まゆへに
萩のいかまぬるやや萩のるぬを世の形うこのゆへ
に法ゆをいかさめるまや後結ぶに萩うをふく
まりとすまにをみをみ形ゆし幾ちひ世辺に紀
うしぬるむ　又一書に情くうるるいるよう
そのまうの形きく思ひのかとを擬たまえとす
まひの勝負ふうせて曲芸をさられうう西流
萩のうとけるきこさるをえ一ゆ言を燒
義の世えまてはゆと萩とのるよしとう
うう思ふをうのるうふ踊子の姿まゆるれまう
ものるるるやうるうまを意を形まれるかるる一
愚考案ますを鶴丈をかるひうの腰とえ

久しうるこ大和物語に曰昔津の国に狩りしまむ女の
子芝ふ京墓の男二人ありつ男とをし新ちの
さくろさーけあつきこ車又物をにこを歌をと
ふいるまてさうふゃをうにとうの形ゆしゆへふい
ゆまををまと宮うねて年月をにうられて歌
芝をえうねて生田川の面に深て侍る水をを対させて
あてくるむ男ふまのをしうを形をうるふ一人
をを歌を対ひうをを庫ふ侍るる女をむくるく
一をの歌を詠して川まをりてえます二人れ男
ゆをいて川まを流入一人をを芝を一人をを
とうして三人をまふ形ふくるりぬ世心を京
所の別當詠歌してを勝まゆまそのてゆた
うむ君ふまりまひふくふの山を鉄とまふの
侍まをぬ一しこの腰りしゆくを歌のさまこ

雄略天皇の御代に二人の男の伺候して勝負せし
歌を角力とりの数に応ずる例なり
連歌の式目に曰物の名を詠ずる数
歌に二句に付ける句を付ける
なり例の如し次の一句を
付て詠ずるなり
幸三句の難なるもとより
古法にて今その沙汰なし
上後嵯峨院の御時前句
してあやまれしと文字に
の日ゆゑ
付て遠乱に及ぶ帝曰
西行の一歌
云々

何の糸さるやはかまき
上手付に一とせ
ますや鹿む二村の山
感頻なり満座感歎す
云々本歌を後撰集に
なりしかば二村山
歌に八雲御抄に曰一首
付る例なり
と云々
大乗寺
を兼ねの諸歌
血脈の伝
歌を付
と見をよ

[illegible]を八陣しまうち志のうきこと
江列甲賀郡くらゝ山れいたくきこと　蒙笠曰佛ゆ
地竜ゝくつの白蛇ゝ翁の威しまい物の志をあ
ようこくをあらうやと問ふゝ社国云ゆとき
かうこれ法よりれめひよせしとこ翁ゝ機嫌
よくいしゝ心かけうとと襲衣ゝとり此傳を
津國ちあうゝの姫をゝうの男をうひて旅
死まあひうち吉ゆをとうあ寄をれときかう
この平氏の武士ゝうの姫の幽霊蜘蛛鬼
を撰ゝ並ひ法の資をゝ吉欲のうちも
むすひ合をて一るれ上ゆをゝ姫貴れ
をくゝうきゝ寄ゆ翁のかめるひしうむゝ
法涉藤のあゆ上れまゆ對てあれ志をゝの
帝の巳十二のゆ物をひの角力より風出し

まゝうゆ蒙あれ吉ゆ不合体して俗ゝうゆ
志ゝきゝ附ゆゝうゝ法ゝあきあ
れ表ゝうゝる吉ゆ　吉ゆ二ゝ利健の姫とゆ
つの吉ゆうゆうゝつの三あれうゆゝおく心を
ゆめゝるはゝうきゝ寄ゝ元形ゝあを隠とゝふ
へ

蕎麦さく青ゝ滋賀樂の秋
彩月夜双六寺れ　薇蕨ゝて
愚考紫色樂の姫　聖武帝行基ゆ勧進を
して大佛をはゝうゝめゆゝ志ゆ寺の大佛
ゆ即是を移ゝゆゆゆ故ゝ姫とゝゆ文彩月
夜とゝゆゆゆ和歌ゝ会墨ゆゆ夕月夜ゆ歌
すゝゝ翁ゆきゝ人ゆゝいへとを交ゝゆゆきゝ
と云ゝ　愚考ゆ後の説いゆゝ　万葉集一説

最石小京迄千寧宗宮時孫略して云佐保川ふ
いゆきいたさんて我庵しさ小安の上ゆ射月夜
さと何そ我翁ふ慕恩何のらむや
出のふ月ゆ業とて離を法ら居る
人命婦の君より家を思ふ人を見ぬやこ
一書ふ離を法ら世を思ふ人を見ぬやこ
とをき法ら形らへしとて命婦の君よ
り来なとふ法き越と謂しうと云て　一書ふ
出の二句をやことをき人の恋て面白しふと
いふめるを覚来なきるを思ふといへを
恋君といて恋と心得しるを何をきゆ
ゆこのきまて津波の孔ふ影通ゆき
一書ふ来のおろうの孔を津波のなのしの孔義
なとて捨しさるまう　一書ふ孔を裏すう

のはすらひ来と孔をしう
といひ命婦より来るを紙すといひ只人をるを侍
るふ法るみを法をて大伴皇子の侍とをう
十寸鏡ふ曰大伴皇子事為めて難波の津ふ
出ひるをて中略その比言波といふの吹入て
浦ふとしく荒ら出ふ供れ人しまよかとり来
るく成ひしく云く新ふ云言湖を津波ろ又
洪波狂十寸鏡ふゆ法ろて略す命婦を官女
れ内五位以上を帯を内命婦とゆふと云て
佛喰ふ　魚　解き　ろう
一書ふ潮改國何の浦とゆらふ鮫の大
魚あろうるふ恵心僧都の伝の備後
を脇中より元出しるるのあるこ
一書ふ讃州志度の浦　長田の伝平恵空上人

愚考　雛を法ら

のすゝめにて一心念佛は行者とともに或時
志度の浦津波にて讀誦せる餘の
船よりも惠心法師の弥陀佛を帰依すると云
事ゆゑ少しも疑ひなきものなり
縣　ある花見次郎と作られて
一書に花見次郎といふ者日向國に住居
ところの武家なる者のありしがこの近國に流
浪せられしの花見と僞ひして名を志ら
ましるゆゑ其の後名をいまて花見次郎
と仇名をつけ給ふとぞ因念にいといふ
事なり　一書に次の畠六反を彼の長者へ
の地方多く接するにて別に子細なし
景清や矢剣の橋の事をきて
庵並に松をよみて送りぬ

一書に平句の二の外篇長句にて[illegible]短句にて
も一定にても一句なり長句は[illegible]短句の外
とも差別ある[illegible]　一書に景清は橋
八枝東第一の長橋なりして長さ二百八間矢作
の里にて日本武尊東征の時矢を作りて
よりして此の名を呼ばしめり　愚老平
句に長句短句にわかれ或は一千句[illegible]
とて独心の迷ひなり景清やそ名所のやうに
此へおぶとも篇なし又日[illegible]
を心別なる此へにそ[illegible]と因て
のうちにて決してなかれと志るべし近代の俳書
に論ずる揚句に武篇を出せり[illegible]
なるを證を取上もせりとそれゆゑ[illegible]
一つ年中にするの族なりとて笑止なり

也よりそめ小筆墨を費し故同し面の見渡しをとゝ法として文字を改る事増て況や両頭小松いとをや家に

詩 商人年を人賣る酒 價弐 其角 翁

冬 湖 日 蕾 て 駕 鯉 る

さの数多と服を白ひと揚句に

詩 商人花を貪る酒 價この那 其角

春 湖 日 蕾 て 駕 興 吟 翁

きつきを首尾連環の韻とし別の意向を

すしめる也に因意の格式なり狂立春一日江

揚句は桑下に書し 一書に矢刹の里

在屋の庭前に大きなる松有て世に名し往

来の旅人求めて見物しなこの享保年中の

焼失まるくなりしとそ是れその松に特て

詩歌連俳の風雅を

拾ふ子を柴苅長のひつゝむ

晩日を ゝ 刀 蕉 三井

一書に老松の壽に上よせて歌に

圖吾つみの子を松の出ちを家なる若の

つまし拾ふ柴苅長の子今を

宮て成出して柴苅の業やあるむと

いまこの子をそ小松をまとして

歌の意より出ひ出ちむ又小町ものうに

枝をこしを都に知りと塩この方のものきれう

らの松を意きに此歌を添て小町を捨ちと

あり吉のきえ松の一字の解に使わり次

の句を浪人の愛に流て重代の刀を賣

て年の用意をもむとなり

雪れ狂吳の國の名をめつらし
一書に一絶して名利を捨て刀を賣て世を
風流の道人と遊ぶ心より古人の詩をも
かなひ出ぬるを恵宗れ詩に金重吳天雪皆輕
楚地花　一書に東坡をもの併まして
あるしの賓客と指しぬる吳國の詩狂人雪の
無に来て訪しんを秘義の刀を酒に代て餐
應す信友の交わるり侍に黄金不多交不深
とさいまえこの朋友に信なき人の薄情を
誡めるに一吳國の名立ると麗名高朝鮮名立
東坡笠の數なる一　　魚考先注の刀を賣
ふ人の詩をれるひ出ぬるとを非るり向ひ附て
風狂人れ棄まるこ後の注の賓客を又非るり
朋友に信なの事えとして秘義の刀を酒に代るも

表遠なる一し彼刀を賣て年用意する刀をその
東坡笠ふむ守りて風狂人の棄るをめつらしく
よろこびてすてるまさかりこの云友を方より来
ふ又ものしるしやの語に蔣合して一條風流
に見るるり此刀賣年此年とい字をいつく
えてうらか安言をハいふそ
襟　1　ゝる　尾　この　斤袖をとく
あるハ〻檪を振に呑かさむ
一書に彼雪見れ狂人に言尾の斤袖を
切て襟巻にかなる侍に無あ〻大しむとく
全盛〻の仇ならに次の白を則　揚屋の
侍まて賓に劉伯倫の詩の意をとを賓
さ〻劉伯倫性嗜酒嘗携一壺酒使人荷鋪
謂曰死便埋我

芥子丸一室に入名をおそれ禅
無味堂目色情に懸ることを禁法に潔して
一休禅師のいまさ成道するに対絶書に
よりて芥子一粒を呑むを縁て本来の面目なり
立すること一月ばかりよりこれとなりそうなるの俤
なるべしう

三日月の東をくくくくと撞の声
秋湖のすうに琴をつまもれ

一書に一室の芥子に本禅の眼なる黄昏時分
三日月に蔭の宋なるまよりを省次の名西
山に三日月をなるのめ東に晩撞をゆて
湖上の泛舟客を惜みて琴弾ずさくなる
ろむ　一書に芥子の一室に入相を伊行を
常の心なるべし次の三井寺ゆて

秋夜湖水に月のそみしの徐来水波不
興飄々平め遺世とるるに赤壁の笛
をを松の月のあるひに　琴
きりに至て忽借をして
そのの琴をあらきそうてひくとすべき所
なるまとに千眼一統の場をおはるまて一
端なる興に楽しして借れとも借りて来る
呼をやの興をれひてその侍とすという
例のものの如く向上の自覚にして尋ねの人
の松のひとくるる所なる一　五考一句の少
やう甚お遠きり三月も蔭の声に西に一て東
の方をくくくしといるなるる次の名々三井寺
と宮て湖上の琴を少とりの名なる白虎通
に日琴在南方鐘在西方琴とすとそいく変

きく同じ義を弾ずるを以て人の耳近却の意
なり人のそいとなるの形〻源氏松風の巻に見えた
のひまをうてこの琴を弾ずるに又古今和歌集に
ひく引くしその形今の古ちゝ〻の人とおく狭衣に
日琵琶をとりよせて姫君に奉りて中将に二絃の
ことを弾ずるとき声を高くしたけ
唱歌をなすに人やきれてこのきゝうしに同じいるのて
まるまてはうたるる又論語曰子与人歌而後必使
返之而後和之

高流水をゆるくしてたせを放ちて
声をきき念仏鼓を聞くつゝみ
一書に琴を引くして借られとも弾ずるとも
とりてをきくに人間てそのたせを弾きてそつわ
れとも的得て是をはや喰心をなくて

よく琴を弾ずるを助け得さすして放生の自然
まて意を不思の見識を見ちらるるて次ハ
前自をを弾つとをいとよう殺心のうちをえ
きゝうゝ略　愚考白虎通に曰琴禁也禁
止於邪以正人心也又風俗通に曰琴今之為言禁
也雅之言正也言君子守正以自禁也又以
心雅之聲動感正實故善心勝邪悪禁又樂
書に曰琴動天地感鬼神その用しちら
を変をいく変もし引くすを不の〻に眼より
内消するに絶日弾ずれて今やうつらむと
するに湖上の曲声に和とろき春れ魚をの
ちらに湖中一手のるきるるを芸まて琴れ
徳ををきしうに次の自をを又なに
ゆへにそのたせを放ちちるをといふに蘇軾の

為仏を寺院てをめて後世をとゝ弔をなとゝ
教生きゝ甚はやまりこと若心よひるゝへまて
敬ちゆゝと又為仏の徳をはゝかりしゝ琴
と為仏とゝなて中の天世的れ心を改悔もしむ
応琴をて時く為仏さまきゝの世へよ為自字へ
て後自一奪へさるものゝ是らゝを為れ日三四の要所と

はゝの墓　花　魂　と形のうけよ入
その墓の日を我も知すく

一書よ西の上人ねゝのゝゝ花れとまてゝる
死なむゝのきさゝる死れ是月のゝゝ二るゝ是
ゝの死れ意ゝて祖翁をその日をねゝゝのの
ゝむきゝり　為考揚自をその歌をはゝ
ゝゝるゝしゝりまゝ花の自この全体西行れ歌るる
の世へゝをゝを翁の引色みて作ゝゝ所

山家集よあくうゝて心のゝさゝてゝ世方はゝゝら
ちゝるむれらて方よゝる一き此歌をよく味
ゝゝ一名人れ意陳ゝゝの是れ日しゝ月
ゝゝて見ゝ人の自ゝゝるゝゝと見世感歎
ゝるよあゝりゝ但一首ゝて三首ゝゝて他
世のさゝゝるゝゝ所ゝ是ハい法ゝるゝゝ

ゝよ波律よ所火焼家をすけゝれと
一書よ万葉集人丸れ歌雑波人世火焼亂をす
けゝれと己の妻をとゝめはゝゝき

炭賣のおのの妻をとゝ
一書よ汝のすきゝひをゝい中き炭賣歌き
妻をいゝてゝゝゝゝめゝゝゝあゝてゝめゝら
ゝゝむとゝゝひをゝゝゝき書ゝゝ為

[illegible]

中略炭賣扎妻を思ふ

[illegible]

意を人九をあ[illegible]

[illegible]

人の粧ひを　鏡　とく　寒く

[illegible]

花蘇　馬　骨　の　素　小咲　[illegible]

[illegible]

平[illegible]

[illegible]

篇にまとめ給ふ又同書に芦原を四まつのこの世
て里者し　宗因を山れ松を植みてゆきく
給ふ　專順　その里の芋　植樹　嘆ふ　篇
ゆるされ第三篇にまとまるあるに平句まあるに
誠に第三の句なり　うつれぬく作るけるを第
三に篇りの論なりと云て　一書に芭蕉五文字
紙衣の第三なりて入られ五文字を変こ
又醤太れ長くの俳諧　変れ変くの俳諧
よりてうそれ入られ初めよりいとくく
七字れ位あるを心得て句作すべしと云く
無考後の論一向に入られ変ひ第三まるる
篇十句の第三に作り方宜第三の意味と
いふ方不なるに作られ平句まあるに大山松蘿
といふ句法にて作る句の篇を変られ

るるなり仮令十三条の法にて句作られ
て第三まるるを知て句を出るるを芭蕉
第後を知て句を出るるを芭蕉
なりゆく猶句を心と嘗とを作の作く
何にてあきらかのなりて可なるむ句出て篇を
て第三の本意とするといふて句を得ん余ないて
安く得られ一し近さを出られて篇にして第三まら
故郷書を見て心身つき事なり

鶴　見られ　窓　れ　月のすのこ

一書に芭蕉蘇を窓先の生垣とる見形
る書の書といふ句を侍を仙境と
もれりひよりて静なるを作りしむ
遠に梶和靖の俳を分のものを形に
と云く　篇考いふ靜かなるを梶和靖

の俤やいあり芝より潛よりの処ありて詩を
附するなり焦氏筆乘に曰鶴愛陰惡陽
易に曰鳴鶴有陰故以雨鶴好霜故以霜
さまたげるなり附に雀をくるる花
の咲花の糸物なりと十二ヶ月花をれのとなる
風吹ぬ秋の日　瓶に酒なき日
一書に秋の日のさびしきに瓶を
の酒をへなくて寂莫の意花なりと云て
為客況なるとなる大に非なり秋の日はさび
しき物なり瓶の酒なきに到秋風の況
まさるなく吹まして自然なる必ふの心なる況
手のめとなるべし又一書に云所先生の俤
なりとする者なり
萩織る笹を刈て市にうる
一書に萩の花笹とする者非なり萩と萩
との写し違ひこの　一書に酒なきといふ
萩めて造る笹を市に出して賣らすなり
ふるなるを振舞と同意なり
加茂川地胡麻に繊迄
一書に加茂の川辺稲荷の神子此時の
好事せるものとてそのあるを集く胡麻を植
に一本も枯なるなり故に此時を胡麻
の代とかと云なるべし
一書に前日九月を稲荷の加茂の来社して九月上の
午九日に此所に有
いまくらの　舞附つゝしの比
一書に岩倉に鞭る迄きおきて加茂に岩

金を活かすべきを思ひ
よりて必ず奪ひ来たるべしと
余が方より加護の為則ち思ふ
ままに相武帝玉蝶結構の
堅めなり地を
枯れ木に布橋記
うきたちを越ふ平
一書に笑を含みて
を三平二満として乙巳の
侍に三平二満過則休
を礼記曰十五両年二十両嫁故あるを二十三
花に注橋の懲し 捨 ふけ
一書に橋のちり残るを
花を祝想しに附まらむ
法にも懲をよりて
ふすつるをまつとなり
一書に橋の懲を 夜の
額を有へしと云く 愚考
ふを祝想心裏の妙華に
場に変となく祝ともなく
と呼に拍子に彼納を
ろき全心に立陽て
橋に懲さる妄想のこと
注と虚に仕りものに
をいらこのむと歩冬の
あらをしを減に蕣に
に絶ふ花のこのひと
海蒙後のうけたり

愚老岩
則ち思ふ
三宝を

成義曰容
休 愚考二十と
故あるを二十三
捨 ふけ
を松ひくらくて
盛 勢識の日松

懸の字は書損ふ字なり
[illegible]
一書ふ花の紅おもてに数条を言祥師なりと云
しきりむ[illegible]花の紅おもてに数条を言祥師なりと云
ゆきは好色なるこしきて帝后の姿ふ
て数条色の白衣を白きて[illegible]麓の中ふ波
しさは字貞けさうしまるふ散て[illegible]
多ひて山ふ貞山吹の花いろ衣あ[illegible]
と出さくなる[illegible]
[illegible]
[illegible]衣書ふ衣の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

とりくへ
[illegible]
成美曰西京雑記曰[illegible]后在家嘗有白燕銜白
石大如指隧后讃[illegible]中后取之石自割為二中
有文曰天地后乃合[illegible]遂還合乃宝釵又遊仙
窟ふ白燕[illegible]来白玉釵一書ふ白燕を日本に
[illegible]玄宗皇帝楊貴妃の釵を鑄
[illegible]
[illegible]
天皇六年清和天皇八年白燕を献る[illegible]
燕雀の数[illegible]
[illegible]
伊勢齋宮神道之大祖也日本神道以天女

弟根本則天女と云倭姫命と云て日本神代の祖まして御歳五百余歳まして石隠れ給ふ今れ隠ヶ岡是なり本朝皇統の貴女と謂つへし扨委しくは倭姫世記等を引しるすべし

さうひをそなへ一しきを世の人は

を野の宮に三年はれ神ありて敢隠りの

日本武尊は橿を神宮の山に鎮め柿

加一命は芝を別まのみ人といふ橿を串に刺髪

芝を伊勢の橿田川を倭姫の山橿を蔵し

まふ所なりよて橿田の神社なり

八十葉を三つ重ねる事如ものち

一書に鏡を鑄るとは神籬は即鏡の

と見入法国より長寿の人を召て鏡の文を

老業の侍ふ所なり又その中に人を余

しても乗ることは法なる事なり

食数の殺あり打越納豆まくとも

画者に乗ることなるもいつまでも非なり茅の殺

殺しまきても一るうこきて

のさうに桃花を投る色言の行侍れ水を

のまむとするに山路の殺うけうをこの殺

のむといふなり高青丘の胡帳を冬春

掛ト一樹今日誰共開見を枇杷なう又新後

拾遺集に山路は越波なくもかし

はうひゆくの井蛙の玉川に流れ

殺の新のうはうこそ水を春に必定をう蒙

のうはくは一入しうへ退耕録に曰元和之

時飯園湯蒙待学士者飯麒麟草此外東

坡の門客之殺等其例あるべし

白燕

宣旨

一書に白燕を得て清涼山の清泉に栖めるを洗ひ釵を鑄る

しるしとなむ本草に人見白燕主生貴女故燕名天女次を洞冥記曰漢元鳳之間招美閣有神女留玉釵与帝帝以賜趙婕妤至昭帝元鳳中狐見此釵宮人謀欲碎之明日視釵匣唯見白燕外天　一書に燕の一名を天女ともいひ又白燕を見て生まれる貴女を故事なりとも

まうその貴女ようして釵を鑄たりける宣旨の下まうと附こうへ〜さて此宣旨のこと〜まうてかの歌のうちを〜〜〜〜と

物ひとそよるる釵と虚に仮〜〜〜倒のあれば

よりあるを仮りとなく　一書に八十を三つ重ねるといふ

一書に二百四十余その意を毋なりこれを見てそ思むつ

又上の八の字を排字のなやまりといふ非こ

又八十氏川八重葉のその数をして只数の多きこと

いふを物りの又七十二重ねて八十を二つ重ねて八十を

三つ重ねこと以説なりいふ見よ重ねるを思とあり

第二に曰多喜安元法眼のの語に白燕を探ちて

すまうとあり肥然城中に白燕なり城の一生ある

あり子を生ずるを見るその子白燕を見る事

三度法然上人の説として雑事を集る書に中

に曰大和国竹林の巖上に居して勅して神武帝

の玉釵を鑄ふ法国に勅して百業以上の

男子に釵を取るものを召集て見に殺をしむ

玉冠を鑄るの例なり竹林巖を拾て美

地ゐけれど たとへの我家に佛舎を開かむ事を欲
す下略 此古支等ありて此三句けかなり句は不審
なるし八十年を三ツ星の壽と侍りてまた冬の
日かかれ曲なれなり冠段なるに哥ありし今を百
算といひ壽ぬけたしとすまひと世下星て天地の
気弱くなりたるにありて人間の壽命みじかく
なりたり禽獣草木とも不むかしに不及まで
なりし此時代まてそ人出生かしてぬけたし
うらぬるよるりと云て　愚考白燕と翁を老女と与
一八十年の候ふれといふ神武帝の玉飯ーと尊ひ
まうられまけいふ傳稱を慎く神武帝を重
しきお鉄に貝ぬかうに役かゆふに條かいへ
欽壽候きをあらぬなり
なりまたらそむかし七夕れ候ず

一書にいふ尭帝の時に織女の不孝との邊にあか
らむ織女は天帝の娘河西の牽牛と娶る夫
より織るまきを怠りして父母ますます天帝大に
いかりたまひ中ををさけて天の川を隔て七月七日
一夜の外逢ふことをゆるしたまふとぞ　是則此人を断
神となりたまふ一書に二百四十年の壽と見て凡人
まうてよりまし仙人はまこのみなるきにあらぬまし
とよりて有の侍る表に林和靖の傳は薪のに出てけるに
そのかよもに承れ人をさしてきて云天人影多
一しとみて七夕の壽を仲人まうらと秋香かなそ
侍ら蘭言傳の合ちる一しと云て　芝山日七夕の
壽の荒謡すし阿まいひなをとしめてとしまに一
夜をゆすしなるを中陽神との時まそてあうそ
神のも役まいらなりとそ云く　愚考蝶神をふ候しむ

澤うを釣るとて舟を中に引入れ酒のみ詩作り
隅らの暗きうちに照らす春
西南に桂の花咲かれば　時
一書に云七月の月の一日桂の花を月の
うちにて花に喩らく十五日を盛りとして七夕
は花をいうなり答とは云そのゆえを
三日は云なり答といふなり　馬養
しくしての杜撰なり七日の月を新月にて月は答と
利日に作るなり誤なり七日は月に一日は月なり
十五日を月華なりとなり答とは仮をしめす
蘭のはなしこと　木　二ノ段　冬
一書に云歌の隅なり菜油菜膏として菜は油を
とるなり陳藝器に曰菜草生澤畔婦人
和油澤頭故曰菜沃秋の夜の長きを

うけて家業をなす市中孔人の油引るきをみる
幾の家に賢なる女ありて　神武
思考琴操に曰孔子蘭の独秀るを見て歎して
曰夫蘭を王者の香草なりとして琴を鼓す此曲猗
蘭操と号す淮南子に曰蘭を男うゑまた花
をうゑまた香草とも香草とも香しといふまた香草
花をおそれ香草に見るとも附るなり次の
哭泣の女を幾家に見るとも附るなり次の
なるものにて爰女孔伝の説なり一書に
江口の君の伝なりとして非なり西行上人に
口の家に一夜宿をひらきて見るとなる
なるなる一
　　七月
一書に云疱瘡の麻疹のまし云方を仕出

て拵へ来るを一し栗饅頭にて拵へかさり孫語りて
一入おもしろし

敷　向　弁　慶　社　宮

一書に云ふ正月の晩拵ひ来るの國俗を
陸奥の果なる見出して弁慶の宮に祈
樂敷を折て向ふなる一し一説に米粉
なるを紙に包て向なる色を向といふ名
おそろしくそのもてなし

寅社日の旦を飛法社起て
一書に弁慶の宮より見入て力立の武仙
を祈足名仏を祈一むとおもひよも寅の
日の未明に文を清めて素隠の筆し
一書に台命を蒙りて名所の敷を折て
と意敷を起すて私のちろに及はされハ

勇去の社に参詣して寅の一字を紀の
書名なるを　為名なる敷とを仏なるを名
を折人の則名なり手將莫郎天國正宗に
この手なるを名の人の名なり私のちろに
よひろ〻とを仏なるやさるいに人に台命
をやさむや又家の一字を紀のひきを
もし法華社襲詞なる丈天を子まひけ
地を出ひひ人を寅に生る故に子に卯寅
に起るを天地自然なる寅を猛獣にて恐を
司る故に寅社日を祝に力立の来るし
宮年宮月寅社日に来るを力を三寅と号し
て伊豆接現に納わしとなりさすれて　寅ハ
一分社眼なり

雲　このし　そし　き　南　系　の　比

一書に南京を南都といつるなるべし 未詳
を力工の多く宿所なるまでよりや雲くくを
きを皇都の地なるゆへ崇敬の初なるべし
一書に于將をむかひを南京の地とを聞く
らむ南京之来呉の地なれなるべし 略 愚考
呉の于將を非るべう言野刺刀を元刀を良
必定なり

ねゝきして徒らなる人の像

一書に素良比所を僅なるまして国離ゆひて
て在を太閤秀吉公の比人舎第大和大納言辰
の像なるを今を所の農夫を為めの考之
愚案芋より不別に論事

仙の方なるしを学ア 押 やの て
祈ら生始 長を考むら 亟

一書に初陣の名称ハ一ハ保元を一と見えた
姿なるむ次なるの人れひとり鎧のの物式
まて二自一意なり 愚考先一自の吟味大切
武士なを生を鎧の上に弱なるの衣を生ハ武
士なるなる堂上の侍なるゆへ弱衣の下に
鎧ハとハをしものと武士を鎧ハ侍なる公卿ハ
物衣の体こされを此三自ハ侍源平盛衰記平
家物語の侍ハいるなるの侍なるの物
しの侍なる初陣を送るに武士の戸めと成て
なるし字押申るの侍に曰村雨を
李ハむまひてなる字ハ細なる李ハ
てを四月ら七月ハ所ハ一所侍ハ李解一
とはてを四月のうらなるを李ハ物語を侍
てを明月れうらなる於鶴百韵の中ハ秀

しく論す

因家眺望

霜月や鶴の子くまもひ居て

冬の月の日の比の句 余情紙毫に尽たりとす

一書に此眼を余情の日比の歌号を見るに

のく度も此句を味ひて詠るのよきと 一書に

此の眼を能の説に云て此和尚の足出しやすれ

ども只俗に云流しやすい業なに

此句を俗と解く舌代の歌の上句なるに

仏句にたとへし句の心まてをうつすといひ

ふるもの 一書に鶴の子くまもひ居てとしか

まて句に歌を見るの意味究て新し

それを句まてをうつすと作るの意味余情

りて一つ不可説くてもて是を解する所也

却て第二義に落一書に

是をかとまもひたるの句

すると云古今の歌説なり故に宗祇の歌号の

説を論じ歌のよりしたひ句きを一

又眼の句余情紙毫に尽の不可説く

是を解すれ却て二義に落れと愚昧に

文盲に此上やなる一き眼を句の余情を句

らすの本体なり若句をとけ

一是余情の句を

水鳥者稟陰鶴鶴亦夜鳴又禽経曰鶴伏鳴則

陰仰鳴則晴又酉陽雜俎曰蛙抱聲鶴抱影夜半

[illegible]

[illegible]

[illegible]

進まんとする時に引張らるるを引張らるるまゝにしてゆくなり
るまゝにしてなのちらるまゝにしてゆくなり一説のごとく塩の出
なのちるるを言故事曰埒雅曰牛走順風
馬走逆風

ゑまき　形きく　具足　太刀のうすし と

一書に陳氏云て塩と見えて書るまゝといひて具足を只
飾のみ並列と対文法の甲斐の軍場の使まゝえ法る
無考大りさよろしきまゝ牛は詮といふものの
見えぬるを引張る牛まゝ月の濃まゝて陸中を
一名は撥撥るの意ていいやは月を定るまゝ
とといふ心月といふ字の非入用てるけまゝは
美名の月をまゝて出すまゝ月の字三るまゝて
あるの世話きふまゝあるやは十四文字やは十七
文字まゝて涼鈔の意味のなるるまゝ腸と

まゝねを解まゝるの世説新語補曰奮云臣猶
呉牛見月而喘又風俗通まゝ出まゝ呉は地は南
の果まゝて暑甚しまゝ牛の類まゝるまゝ月
を見まゝて又喘くまゝるまゝと云まゝ故太月をまゝて文
太道まゝねを引張るまゝと云まゝ陸まゝるまゝ此月
まゝて引張る牛をはまゝ陸まゝるまゝと和一

酌　ちう　茅　葉　切　いて

出葉集に茅切まゝと書て出しまゝ云語
は月の名まゝ予は思らくは茅の茅のるまゝて名まゝは
必見渡しを忍ばるのるまゝむをるは花てるる
茅を葉切まゝ出と一名は禁懸隔と
一書に血まゝの酒毒と統向を定め大將ふ陸
方の毒仏の花を生まゝむとまゝ名付まゝ
余情なの此注まゝて毒の論まゝ

なりてその罪をゆるすべきみ
仏は法華の法連歌いとこうわよ
御子たまひて富士　ゆ歌寺
一書に第百九十五席上の活花なり富士
仏上活花下向歌沢抜引きたる新しきの活見寺の図の法連
歌なるべし　一書に仏法を
たもちて陽を究て三国無双の不老と傳ふ旅
の一字に力なり　為考活見寺とそなりそや
いかなる法花を先注をそのやうなるべし富士
見ゆる寺なるべしとて花めてこの歌
河の内に寺なるべ活見とて
まもるべしなりうこいてそ決して海無つ
みうつこきさみなるべ後のるまて定るこ相列
まてなる富士ゆつ御子たまひて力を入給ト

見ゆる寺とそ禁ずるなり一名の空のうときう
上に東海道なる見ゆる見ゆるなるべ
なるべ歌に論なり

舞として樽の前花の前なる者
菜に菜に菜花　をそ　むら雲の香
一書に菜いろに菜を薄るとなるをいを仲を
ハ云ひけるなる樽に掛竿北余情もあるむら
一書に菜に菜花の立れなる蘇天のさなを例をそ
なる新菜の自ひをなるせしなる　為考
いつまでも非なる菜の木に事花のなるに
菜の自ひをなるの吹き菜をすとなるなり
雑題に　烏帽子の女五三十
一書に実まるを義仲の聖勝上巳小吹きを
の女中ひをそ烏帽子特衣なるむとそ義

作まして拙無の俳をもむ

庭よ木芍藥作りたいの蕾哀

一書に近代の俗歌方のはなくさみに本草を

或は本草論の京色を庭前に植ふ作りを

麻向まるものもるもの形むむ雜遊といふより全く

本草論うこと長 一書に本草山の經京をつく

らをてる花子の家の本草なるも一一意の蕾哀と

をもうて書の粧をもむ

文治寺山 橘小さらもえむ

成美曰古今集業雅に山の注山橘を世俗やふ

さうしといふて実赤しきの時山茱萸添

茅草なり大和本草訓平地木為耶麻多

知波赤甚形狀亦全今云薮柑子なり

愚考八雲御抄云山タチ八十を牡丹なり又橙之

とかくさままの牡丹の外ありむ花奎の俳

を好むの附なりまた橘と牡丹を一家不見む

色てまて本草法ムの茅なる野すて後の

麻刈といふ集を寓云なる猶樂唐なり

野なり沢を迫くとなりまた迫なるまえんり

高のとそのくなりむ山いるく沢我月出

を去如実相の月なり丈をおそろといふより

義花を附て宵は甲斐なきくのさまと

旅宿 留は義花を寸拂ひ

籠裏 ゆりは 木瓜の 山ゆひ

萬考義花を不吉のものなるは流人の俳を

附ふうまて木瓜の山ゆのとといふ見故なり

本草曰利筋骨去濕熱治産乱轉筋脚

気消痢腰足無力又轉物志曰木瓜味酸善療轉

節の轉節時但呼末成名亦上書末成之字輙
愈留末義花を義梅の曲をもり公卿の因人は
てれいすりをりの出家をいふくをり来らむ
とれもいたけて行かとは書ひるる新山る
まて人書を見ふ風の花の盛は以ては
るを見能要をり出しをらるは肌を人
るしまて指は拙義の留を一曲拍はれ形ろ
ちるる花を留をり出しは傳ひは傳る面
しまとしひ山間とひうして藝国の武士の心
なを除をりをる花を不吉の義花の
是八次は骨を見てとを附るをる
五食の義をもらは志のめ
一書は骨を見てとひをり戦場の貸と見て
その由緒の人のとくろを葬らむと心ねそこら

は合をるを合の蓑をを交て骨を色み
て除るむとする人の貸るり
流れは尾を引紐を拾ひ切て
墨書骨を色むとは蓑を手一花もひる時
るく拙の除る紐を色むと蓑をるるり
浮書は進む　水　孔みをり
一書は天濃國養老の滋るむとの清骨と
見也　活紐を献る余膳るるむ　一書は
直を除るとはは一將して門殺の清骨し
除をり流のかくきは典業改水毒を解する
をりたをるを伝るる一　滅美曰
続日本紀曰養老元年詔曰朕今年九月到
美濃國不復行宮留連數日因覧當耆郡

多度山美泉自盥手面皮膚如滑亦洗瘡所
無不除愈云　勇考小角豆　炭團　芽子　なつか　蓮の
実　月の巻　狐の持　此七ツを共に煎じ用ゆべし
又話の体にして紀しりたる書ハ古そ
川特殊の仕方とそ見えたるもいとをかし
なる仕方なるもの天子を行幸と書つるなり

霧　おく　狐　風や　ゆう　乳　しき

勇考時雨を悲しむ歌　紀朝
帝十六年北丁をキツるとそいひ姫しこ五雄亜
曰巣居知風窠居知雨猶を穴に居るものなる
も雨をさ形しに　答ふを風をとうるしふる
源更に及ひ秋天注を珍脳としてこの
一面に並わしをとうるを注ぎとつとき

れたる所を白注ゆのそうとして為さ
ふを狐を雨のこと云ひて色の空ハる水
の物に遠むるをうれしふとを識に出る　ものの
一ふるるうとそ古の七ツ為ふ　ものの
注を行遠とるこの記を自れ紀りに擬して
ふりの物をする文ハに夢をくりふるを却て様様
を失ふものの

是　齋　ふるうて　毎れ喪に入
元　故の　家れ　被ふ　一

一書に所庭を喪家に見ふ古代を葬と
ふり移てうくひきしに遠るものと大和国ふるとして
を上代の遠ふまていふる意ふるを亡夫の鑛と云
を作りて喪中畜ふるうとして毎の喪と云
ふる元故と見定て隆法師ハ慈母ふ

孝心ある人にて蹇の如くに貧しく方延山に諸し
紙しの詩歌世に多くそれ流の才物法華一派
の師なり形狀を続隠逸傳に書し　藏美
曰之説を表抵奏の家士俗称石井平之丞二十六
葉にて薙髪為僧深草摺光寺を革創す四十
六葉にて寂

伏見木幡の薄花をうつ

無考深草の花を伏見木幡の入相のこゑ
花やらんと仮名遣ふ深草摺と名付
なり古今哀傷の部深草に里辺の摺し心
らんとうたへり薄深草ふかくさ花八図鶴帝
の心をあひらかに雪舟の筆八図鶴帝
彩よりてすみそめ摺らんと名つけしなり此
木摺をエロタとよむ一説に強田と書る

主人の形わ
いろいろきく男猫ひろを捨てて
去のたるすれ雪ふきたるよ
一書に入なひの形なる男猫のつらさを女
京の多情ねさるよりの次れ自ら猫を
奪ふ気を表そなるものは一雪掃をよりうう
家ふる女三の宮の貸ふ猫の　無考
男猫と押出して自ら猫の本膳こ
去ふ男猫ふ女猫を忘ひ林ふ女猫ふ男猫をふ
水手を奪自れ奪若やふ
山茶花ふ不ふ　笠の木ふ
愚考此二句則冬北日一部を巻納めふ自
ひふて首屋連環の格ふ巻所の狂句の
二字ふ對ふ奪自れ二字ふ書ふ無八狂句

の二字をも大切の字眼とす。偖は曰揚名は
はじめて物を起さんとする揚名なり。はじめて意
を出するをも二名一意なりとして卷頭の歌
し服の山茶花を合せて秀句とせり狂名
の連環なり。中八格の格を出せり
めて自生を始めとせり此句近年は俳書に
揚名はじめて意名を出し或は
季を出すを出すを俳の族なり一一新奇
一卷ほとんど文人墨客の揚名を合ふ
例なるべし一格なり。格外弁は古道を濁せり
いなるべし。格外弁は大切の要なるを

追加

いろえんとて雅面うしをうの霰

一書は牛の祇きりの霰の烈しきを紛
向とせり。電者砲也。中物如砲也。下略　惠秀
夫木集は荆小田の略の上を以て霰玉
て雪をうたうとそ又行助此古歌を
いへしの玉をもて雪を因世の霰をのれ歌
といひ連歌といひ只一句のみ
抵為して殺伐は歳一しそまを我祖義の
義明てこの句は仁情の境は入ひけまは
蕉風の世とを一統をり古人は内をは
のを陽ものとしてひとの句をとは
はなくして無句とは文を句なるは
むをいう形をむと牛の句をまは
はなるとをとをるを句は
楊大は

桔梗は松

一書に牛迫の妻宮の舎津にまして塩
油をとる能登一附生牛十かと云く一連
に迫り行跡のてる牛の骨まてねまり形を
泊の度と云牛を貫くるし牛迫
仮に篠巻にせんとして蓋をかぶせ
と接ひあつめて焼酒を壺の底すりまと
めをして休むあるして焼の後をうつして呑こ
牛の部分に注て附をきらせ歩りの壮年
形勝の沈のてのくるて形をとて
一説に曰焼を火葬の
おもるるをを焼ひとしいるとと云
酒をあるくめて夜を
まりを俗此の元火を
て焼火焼ひに焼火といひ
焼火に焼ひと此焼出し

人足の宮の初めの焼根をよりて体
のるるを焼ひ焼火して松の根を集めと
実に焼集るるるるるる大体此体に焼ていい
焼るるるるるる

木紙荊 木紙を墨にして
一書に野作のなりして木紙荊を見出し
るるるるる菜荒繁を油を貫に結して一本木
ねるるるる表てるるるるる羊をむといい膳作
るるるむ 一書に焼火焼ひといを庭燎或るに火
焼るるの神るとるるて神いるるの紙と膳に
るるるる 魚等木紙荊を秋乗るるるるる
を神るるるるるるるるるるるる神るる
の沈法をいるるるるるるるるる
るるる此を先注のめく木紙

接望ふ宮をやなすす　秋霧

一書に山路の体にて用明天皇いまし〻皇子に
てすましし時彼玉代藤を意ひて萬にやなす
しに侍る　一書に宮方は藤ひ、すして
供奉の人〻に賜ふ歌を立てうたく侍る
一し

祝に　恰　の　歌　月　を　海
ひとりに　恰　をすす　岐阜　山
一書に六月宴　の源泥しえて祝に
恰曽いを歌と形〻歌次を燒　恰の素名と宣て
左に恰をすう〻右に改阜山を見る眼鏡く　一書に
表をり社河を名百沈義を出す見等蕉の
多本多一し

附て云冬の日を許六曰次韻の風調ありて花
よりの人は解すつきりの人と書置しあり
さうを種しの注釈出来りて却て俳諧を害ふに
至る而さおりく故に雜陳ちさ形きに及つ是上の
れもをくを疎に而り〻を古集の解しちひを
今れたいの上に人に社儕を引しえれよる意
えを意をいふまして言葉めむとする筆鋒こう
もりくきひしきりくさるを引しまを
この形うう私の宿意にあるを意にあるゆ
ふ一し

落注

五　形　莫　北　も　く　け　六　反

慕秀前白縣の花え次席を百姓の大家と見
て秣肥に寄れ附ふ見原氏木曽路の記曰美濃国

加納より西を手因りて野原形ゆゑ爲小
餌人ハさゝ草形ゝ因烟よまむけ花とりゝ茅を
植て稀とす又うて荊西取て因肥しまゝす紫
りて思ふ宝蓋花とりゝと云て五形草と作り
ゝるゝ俳諧の虚りゝ先注のまゝ実ハ五形
草とゝて荒畠とすゝを云俗因形の癖案
因法をゝまらぬ羅人ゝり